

## 古代日本語とオーストロネシア諸言語における一形態の同源性 : 3

板橋, 義三  
九州大学言語文化部アジア・アフリカ言語文化部門

<https://doi.org/10.15017/6796397>

---

出版情報 : 言語科学. 35, pp.47-64, 2000-02-29. 九州大学言語文化部言語研究会  
バージョン :  
権利関係 :

## 「古代日本語とオーストロネシア諸言語における一形態の同源性(3)\*」

板橋義三  
(アジア・アフリカ部門)

## 〔8.2〕接尾辞用法

接尾辞-iの用法は様々あるが、基本的には上記の前置詞iや接頭辞i-の用法の分布や用法それ自体と非常によく似ている。この類似性は偶然の一致ではなく、同源語の指示的な代名詞\*iから派生して出て来たものであるからである。但し、その派生の仕方は言語によって変化があり、代名詞、前置詞、接頭辞、接尾辞などに变化したものの、その根本的な意味は共通していると考えられる。

日本語とオーストロネシア諸言語との共通項は指示詞の用法、対格用法、処格用法、具格用法、命令形形成用法などが挙げられる。各項目毎にそれぞれ取り上げるのでここでは言及しない。オーストロネシア諸言語のようにある特定の人称接尾辞を発達させることがなかったようであるが、上述のように、人称代名詞はオーストロネシア諸言語同様発達させている。

まず接尾辞-iのすべての用法を例をあげながら一つ一つ見て行く。

## (a)人称代名詞接尾辞用法

この用法には次の5つの下位用法からなっている。

- (a.1)一人称代名詞所有格用法
- (a.2)一人称代名詞対格用法
- (a.3)三人称代名詞主格用法
- (a.4)三人称代名詞所有格用法
- (a.5)三人称代名詞対格用法

日本語/琉球語ではオーストロネシア諸言語のようにある特定の人称接尾辞を発達させることがなかったようであるが、前述のように、人称代名詞はオーストロネシア諸言語と全く同様に発達させている。

まず一人称代名詞所有格用法からみていく。

## (a.1)一人称代名詞所有格用法

この用法は三人称代名詞主格接尾辞または所有格接尾辞用法から派生した機能ではないかと考える。それは一人称代名詞用法は三人称代名詞から派生したものであることが分かっているからである。即ち、接尾辞に関しても同様な派生があったのではないかと見るのである。それはこの三人称代名詞接尾辞に関して直接的な証拠がないからであるが、そう言った場合にはそれを幾分でも間接的な証拠で検証することが必要だからである。その例をいくつか見て見る。

ソンソロール語(Sonsorol): -i [Capell 1969:25-8]

- |                     |                     |
|---------------------|---------------------|
| (1)mata-i [1969:26] | (2)papa-i [1969:26] |
| 目-[1単所有]            | 父親-[1単所有]           |
| 「私の目」               | 「私の父」               |

トラック語(Trukese): -i [Dyen 1965:33-6]

- |                        |                    |
|------------------------|--------------------|
| (1)máaráár-i [1965:33] | (2)qii-y [1965:33] |
| 親類-[1単所有]              | 兄-[1単所有]           |
| 「私の親類」                 | 「私の兄」              |

\*:この表題による拙論(1)、(2)はそれぞれ九州大学大学院比較社会文化研究科紀要「比較社会文化」第6巻 2000、九州大学言語文化部紀要「言語文化論究」No. 10. 2000に掲載されている。この論文(1)(2)(3)は本来「語源探求(6)」1998年に掲載される予定であったが、明治書院において1999年6月の時点で急遽刊行見直しとなったため、ここに掲載するものである。

- (3)kykkyn-i [1965:33] (4)jettoo-y [1965:33]  
 子供時代-[1単所有] 来ること-[1単所有]  
 「私の子供時代」 「私が来ること」

上例すべてが一人称所有格の接尾辞-iを示している。トラック語では接尾辞-iには異形態-yがあるが、これは母音の直後に現れ、渡り音に変化し固定したためであると考えられる。このような変化は色々な言語において起こる一般的な変化である。またトラック語では不可譲名詞はどれでも一人称所有格接尾辞を取ることができる。

(a.2)一人称対格用法

オーストロネシア諸言語ではこの用法はあまり一般的ではないようであるが、三人称対格用法から発達してきたものと考えられる。この点に関しては後に述べる。まずその例を一つ挙げる。

ギルバート語(Gilbertese): -i [Cowell 1951:31]

- (1)e ata-i [1951:31] (2)e taua-i [1951:31]  
 e ata-i e taua-i  
 [3単] 知っている-[1単対格] [3単] 支える-[1単対格]  
 「彼は私を知っている」 「彼は私を支えている」

これらの例は間違いなく一人称対格用法を示しているが、前述した前置詞や接頭辞の対格用法と機能的にはほぼ同じである。が、この用法は更に人称制限がある点で異なっている。

(a.3)三人称主格用法

三人称主格用法はオーストロネシア諸言語では非常に数少ない。まず例を示す。  
 ヤップ語(Yapese): -i [Jensen 1977:69, 199-203, 225]

- (1)baey-i noeng [1977:69]  
 baey-i noeng  
 [未来]-[3単主格] 泳ぐ  
 「彼は泳ぐだろう」

- (2)daab-i marweel [1977:200]  
 daab-i marweel  
 ない[未来]-[3単主格] 働く  
 「彼は働かないだろう」

- (3)bea guyeeg [1977:203]  
 bea(<ba-i) guy-eeg  
 [現在]-[3単主格] 見る-[1単対格]  
 「彼は私を見る」

これらの例はすべて三人称主格用法を示しているが、面白いことにこの接尾辞-iはすべて動詞に接尾辞をつけるのではなくその直前の時制マーカーに付くのである。例文3から分かるように、動詞に接尾辞として付くのは主格ではなく対格名詞であることに注意したい。

(a.4)三人称所有格用法

この用法は人間の所有関係のみならず、時折ものどうしの所属関係を表すことがある。次の例文を見てみる。

トライ語(Tolai): -i [Mosel 1984:30, 163-4]

- (1)a bala-i ra tutana [1984:31]  
 a bala-i ra tutana

〔冠詞〕腹-[3単所有] 〔冠詞〕男の人  
「男の人の腹」

(2) a pal ka-i ra tutana [1984:31]  
a pal ka-i ra tutana  
〔冠詞〕家 〔所有類別詞〕-[3単所有] 〔冠詞〕男の人  
「男の人の家」

ボーマ・フィジー語(Boumaa Fijian): -i [Dixon 1988:120-4]

(1) a liga-i Jone [1988:120]  
a liga-i Jone  
〔冠詞〕手-[3単所有] ジョン John  
「ジョンの手」

(2) a loma-i Waitabu [1988:120]  
a loma-i Waitabu  
〔冠詞〕内部-[3単所有] ワイタブ  
「ワタイプ村の内部」

(3) a wagona me-i Jone [1988:120]  
a wagona me-i Jone  
〔冠詞〕カヴァ 〔類別詞〕-[3単所有] ジョン  
「ジョンのカヴァ」

三人称所有格用法は上例に明らかに見られるが、属格をも示している。ボーマ・フィジー語の例1と2では所有者と所有物との所有関係が見られるが、所有物が露出形で所有者が人名(例1)かまたは地名(例2)の場合、一つのパターンが見られる:「所有物」-i + 「所有者」になる。さらに所有物が被覆形で所有者が人名の場合(例3)、もう一つのパターンが見られる:「所有物」+「類別詞」-i + 「所有者」[Dixon 1988:120]。

#### (a. 5) 三人称対格用法

三人称対格用法はおそらく他の三人称主格、所有格用法との関わり合いがあると考えられる。これらの用法は異なった言語に現れるようなので、その点が気掛かりではあるが、それにしても何らかの直接的または間接的な関係があると考えられる。

ティガック語(Tigak): -i [Beaumont 1974:115, 128, 143]

(1) ga vis-i [1974:115]  
ga vis-i  
〔3単過去〕たたく-[3単対格]  
「彼<sub>1</sub>は彼<sub>2</sub>をたたいた」

(2) ga giak gavan-i [1974:115]  
ga giak gavan-i  
〔3単過去〕送る 除く-[3単対格]  
「彼<sub>1</sub>は彼<sub>2</sub>を送ってやった」

(3) rik lamon-i [1974:143]  
rik lamon-i  
〔3複〕信じる-[3単対格]  
「彼らはそれを信じる」

トバ・バタック語(Toba-Batak): -i [Nababan 1981:77]

(1) dāṅ hubótó-i [1981:77]

dàŋ hubótó-i  
 ない 知っている-[3単対格]  
 「私はそれを知らない」

ガオ語(Gao): -i [崎山 1990:207]  
 トラック語(Trukese): -i [Dyen 1965:38-9]  
 マナム語(Manam): -i [Lichtenberk 1983:21-2, 52, 122-7]

これらの例文から三人称対格用法がみられるが、トバ・バタック語の例文のように三人称対格用法とともに指示代名詞対格用法(=それを)とも考えられる。これは本来同じ起源のものから派生したと考えられる。それはやはり指示的な代名詞と考えてよいと思われる。

(b)指示形容詞用法

指示形容詞用法は接尾辞-iとして現れるのはまれであるが、接頭辞*i*-という形態では見かけるものである。この用法は指示という点からも分かるように、本来の機能である指示をそのまま継承したものであると思われる。次の例をまず見てみる。

トバ・バタック語(Toba-Batak): -i [1981:77]  
 (1)nùŋŋa ditùhOr ibána bùkku-i [1981:77]  
 nùŋŋa di-tùhOr ibána bùkku-i  
 すでに [過去]-買う [3単] 本-[指示形容]  
 「私はもうその本を買った」

(2)jabúku-i [1981:77]  
 jabúk-ku-i  
 家-[1単所有]-[指示形容]  
 「私の家」

例1の接尾辞-iは指示形容詞用法であるが、三人称単数*ibána*の存在から分かるように、この接尾辞-iは指示的強調的機能をはたしているのではないと思われる。また例2からもそれがより明白な形で分かるが、一人称単数所有格接尾辞*ku*が名詞*jabúk*に接尾した形態を取っているにもかかわらず、その直後にさらに指示的形容詞を付け加えていることから、この接尾辞-iは指示強調的な機能であるといえる。この指示形容詞用法は前述の三人称代名詞用法と直接的な関係が存在したことが理解される。

日本語/琉球語との関連では、古代日本語でも前述の如く、指示詞用法があり、それは「そー」系に対応するが、全く同じ指示形容詞の機能である。この機能の酷似性は驚くほどであるが、但し、古代日本語では接頭辞*i*-でもって表している。接辞の形態の相違はあまり問題にならないが、この接辞の派生は新しいというよりも、この機能が本来の指示的機能に最も近いもののひとつであるため、最も古い機能の温存ということが言えるかもしれない。

(c)他動詞化用法

他動詞化用法はオーストロネシア諸言語では一般的であり、割に新しい用法であると考えられる。この機能は次のような言語に見られる。

モキル語(Mokilese): -i [Harrison 1976:54-5]  
 (1)kamehk-i [1976:54]  
 ka-mehk-i  
 [使役]-はずかしい-[他動詞化]  
 「(だれかを)はずかしめる」

(2)ingkoad-i [1976:55]  
 ingkoad-i

## 屋根を張る-[他動詞化]

「～の屋根を張る」

クサイエ語(Kusaiean): -i [Lee 1975:178-181]

(1) aen-i [1975:178]

アイロンをかける-[他動詞化]

「～にアイロンをかける」

(2) sahfuhl-i [1975:178]

シャベルで掘る-[他動詞化]

「～をシャベルで掘る」

ネミ語(Nemi): -i [Ozanne-Rivierre 1994:853]

(1) t'on-i [1994:853]

走る-[他動詞化]

「～を追いかける/求める」

インドネシア語(Indonesian): -i [Macdonald &amp; Darjowidjojo 1967:93]

レナケル語(Lenakel) : -i [Lynch 1978:65]

ポナペ語(Ponape) : -i [Lee 1975:410]

ラガ語(Raga) : -i [Walsh 1994:814]

トバ・バタック(Toba-Batak) : -i [Percival 1981:66]

これらの例の和訳からでは必ずしも明確に他動詞化の意味が現れないが、最も明解な例はネミ語の自動詞の他動詞化である。しかしながら、その他の例でも日本語の本来の動詞が他動詞形をしているものはその動作の言及する対象の示す形式に変化するようである。

日本語/琉球語ではこの他動詞化用法と同様のものは存在しないが、結果的に他動詞化用法と同様のものがある。それは完了結果状態形成用法であり、これも動詞類、形容詞、名詞類などに接尾辞-iを添加することにより完了結果状態を形成し、それを継続させる用法であるが、結果的には自動詞を他動詞に、他動詞を自動詞に、形容詞を自動詞に、そして名詞を自動詞にする機能がある。従って、この項では自動詞を他動詞に転換するという機能と同様であるとも言える。しかしながら、これらの変換機能は根本は一つの機能であり、分岐以前の姿を暗示していると考えられることから、日本語/琉球語の機能がオーストロネシア諸言語の機能より古く本来の機能に近いのではないかと思われる。

## (d)自動詞化用法

自動詞化用法は(c)の対極の用法であるが、オーストロネシア諸言語では非常にまれな用法であると見られる。しかしながら、対極をなす(c)の用法と無縁ではないと考えられる。即ち、時として他動詞の他動詞化が使役になったり元の自動詞になったりすることがあり、そのような意味から無縁ではないと考える。まずその例をいくつか挙げる。

ハリア語(Halia): -i [Allen 1987:96-7]

(1) a barebana i gonogono-be tal-e-i a tsi kihau a tuhas [1987:96]

a barebana i gonogono-be tal-e-i a

[類別詞] 人々 [動詞化] 集める-[応用格] 今-[他動詞]-[自動詞化] [類別詞]

tsi kihau a tuhas

[指小辞] 野鳥 [類別詞] 生ゴミ

「人々は小さな野鳥に生ゴミをあげた」

(2) alia e katsin ranga-me-g-i lö e tamamulö [1987:96]

alia e katsin ranga-me-g-i lö e

[1単] [動詞化] したい 話す-[連合格]-[1単]-[自動詞化] [2単] [動詞化]

tama-mulö

父親-[2単所有]

「あなたの父親についてあなたと話したい」

ハリア語では主語や処格の句を基本的に含まない節に二つまたは二つ以上の項がある時、その項の存在は接尾辞-iで表される。この節は一般に対象を取る(例1)が、必ずしもとらなくてもよい(例2)。自動詞化はその節中に主語の他に必ず二つの格が存在することを意味する。また例2のように格接尾辞は自動詞化接尾辞-iと交替してしまうことがより一般的で、顕示的な指示物-neはそれより非顕示的な自動詞化接尾辞-iと交換してしまう。しかしながら、この規則に当てはまらないものもあり、それは役割と格を区別し、その役割は表層文法では格として現れるとしている(Allen 1987:96-7)。

また前項で述べたように、日本語/琉球語では根本的には完了結果状態形成接尾辞の一種であるが、他動詞を自動詞にする接尾辞-iが存在し、それをこの項では下位の接尾辞とみる。

(e)対格用法

接尾辞-iの対格用法は対象をその接尾辞で指示することにある。この用法はあまり一般的ではないかもしれないが、まずその例をひとつ見てみる。

ポート・サンドウィッチ語(Port Sandwich): -i [Charpentier 1994:835]

(1)e-xan-i na-"d' am [1994:835]

e-xan-i na-"d' am

[3単]-食べる-[対格] [定冠詞]-ヤム芋

「彼はヤム芋を食べる」

この用法は他動詞xan「食べる」が対象を取ることを示すことであるが、その対象が顕示されると、時にはこの接尾辞が省略されることがあり、その点ではこの接尾辞は強調指示的な対格接尾辞ということが出来る。また「強調指示」という点において本来の*\*i*のもつ機能を暗示しているのではないかと思われる。

日本語/琉球語でも接尾辞の対格用法は例は上述のようにそれぞれひとつしかないが、この用法は全くオーストロネシア諸言語の対格用法と同じである。ただ、その表現法がここに挙げている言語例とは異なるが、日本語/琉球語では対象に接尾辞-iをつけるのであって、動詞につけるのではない点が異なっているのである。

(f)処格用法

この機能はオーストロネシア諸言語ではこれに対応する接頭辞のように最も一般的な機能のひとつと考えられる。前述したように、この格の用法は「行為の終点」と直接的な関係がある。そのいくつかの例を見てみる。

ジャバ語(Javanese): -i [Poedjosoedarmo 1986:27-8]

(1)Pak Kerta n-jèjèr-i Pak Marta. [1986:27]

Pak Kerta n-jèjèr-i Pak Marta

さん ケルタ隣-に-[処格] さん マルタ

「ケルタさんはマルタさんの隣に席を取った」

(2)Wahyu ng-lungguh-i bantal [1986:28]

Wahyu ng-lungguh-i bantal

ワヒュー 座る-[処格] 座布団

「ワヒューは座布団に座った」

デュリ語(Duri): -i [Valkana 1995:17-21]

(1)ia joo ulah pura ku-pe-mate-i men-tuo poleq-i

[1995:17]

ia joo ulah pura ku-pe-mate-i men-tuo

[3単] [指示形容詞] 蛇 終える [1単]-[使役]-死ぬ-[処格] [動詞化]-生きる poleq-i

again-[3sg]

「私が殺した蛇はまた生き返った」

(2) ia me-tawa, m-pe-tawa-i kaka-(n)na [1995:21]

ia me-tawa, m-pe-tawa-i kaka-(n)na  
 [3単] [動詞化、自動詞]-笑う [行為者焦点]-[使役]-笑う-[処格] 兄-[3単所有]  
 「彼は自分の兄を笑いに笑った」

カロ・バタック語(Karo-Batak): -i [Woolams 1996:56]

モツ語(Motu) : -i [崎山 1990:207]

ジャワ語の例は一番明解な例であるのに対して、デュリ語の例は意味的にそれほどはっきりとしない例である。後者の例は方向格とも考えられる。しかし、どちらであろうともその祖語の指示的代名詞は*\*i*であろう。

日本語/琉球語でも前に述べたとおり、処格用法の接尾辞*-i*を有しており、その用法はオーストロネシア諸言語のそれと全く同じである。

#### (g)奪格用法

奪格用法はオーストロネシア諸言語では比較的一般的な用法である。この用法は処格、方向格、具格などと直接的に関係し、本来の機能は指示的なものであったことが前述したように分かっている。次に見る例からこの用法が理解される。

ジャワ語(Javanese): -i [Poedjosoedarmo 1986:27]

(1) Yanta nge-doh-i Pak Kerta [1986:27]

Yanta nge-doh-i Pak Kerta

ヤンタ遠い-[奪格] さん ケルタ

「ヤンタはケルタさんを避けている」

この用法は割に上例からは理解しやすいが、例文が一つだけなのであまりはっきりしない。しかしながら、この用法は特に処格との関係が最も深いと考えられる。それは場所を表す格は本来最も根本的な格であり、時には方向の始点や終点をも含んで表すことができ、広範な領域を示すことができるからである。

#### (h)具格用法

具格用法もまたオーストロネシア諸言語では一般的な用法である。まずいくつかの例を見てみる。

クサイエ語(Kusaiean): -i [Lee 1975:179]

(1) Sepe el aen-i wes luhk ah [1975:179]

Sepe el aen-i wes luhk ah

セペ [主格] アイロンをかける-[他動具格] [1単所有] シャツ [限定詞]

「セペは私のシャツにアイロンをかけている」

ヒリガイノン語(Hiligaynon): -i [Wolfenden 1971:134-5]

(1) lutu-i ang bag-o nga pugon [1975:134]

lutu-i ang bag-o nga pugon

料理させる-[具格] [定冠詞] 新しい [連結詞] コンロ

「新しいコンロに料理をさせろ(=新しいコンロで料理しなさい)」

両言語の例は明らかに具格を示している。ジャワ語のこの接尾辞は他動詞化の用法も同時にもっているが、これは過渡的な機能を示しているのではないかと思われる。即ち、他動詞化用法から具格用法への移行である。

これと全く同じ具格用法が古代琉球語の「おもろさうし」に見られる(古代日本語には見られない)が、比較的容易に具格用法であると理解させるのではないかと思われる。オーストロネシア諸言語の具格用法も古代琉球語のその用法も他の色々な格機能と直接関係していると見られ、それはオーストロネシア諸言語の項ですでに述べたので、ここ



では繰り返さない。

(i)命令形形成用法

命令形形成用法はある特定のオーストロネシア諸言語にしか現れないようである。またこの用法は他の形態、例えば前置詞や接頭辞などの形態は存在せず、この接尾辞のみであることもこの用法の特徴である。まず例を見てみる。

セデック語(Sedek): -i [Asai 1953:28-9]

- (1)sa-y-i 「行きなさい!」 < mwsa 「行く」 [1953:28]
- (2)ha-y-i 「始めなさい!」 < maha 「始める」 [1953:28]
- (3)mah-h-i 「飲みなさい!」 < minah 「飲む」 [1953:28]
- (4)ʔal-i 「取りなさい!」 < maʔal 「取る」 [1953:27]

アタヤル語(Atayal): -i [Li 1994:286-9]

- (1)puŋ-i 「聞きなさい!」 [1994:286]
- (2)pataj-i 「書(描)きなさい!」 [1994:286]
- (3)KaniK-i 「食べなさい!」 [1994:286]
- (4)puʃihuβ-i 「吸いなさい!」 [1994:286]

上例の接尾辞-iの用法からこれらはすべて命令用法であることが理解されるが、この二つの言語は台湾のオーストロネシア言語であり、この用法は他の諸派にはほとんど見られないようである。その点から考えると、命令用法は非常に古い用法かまた反対に改新的な用法かのどちらかであるが、現時点ではどちらが正しいのか分からないが、どちらにしても古代日本語と同じような接尾辞-iの派生が起きたと考えることができるのではないかと思われる。

Asai(1953:28 note)はこの命令接尾辞はサンギル語(Sangir)の命令接尾辞-i, -e と関係があり、またタガログ語(Tagalog)の非人称接尾辞-i(Blake 1976:55)とも関係があると述べている。またこの命令派生辞-iは条件節にも使われ、さらにジャワ語の接尾辞-aとも機能が類似しているというだけでなく、他の言語の接尾辞-iの他の用法とも関係が深いと述べている。

これまで見て来た表面的には異なっているような機能をもつ*\*i*は派生形態として、古代日本語では人称代名詞、接辞などであり、オーストロネシア諸言語では冠詞、不変化詞、代名詞、前置詞、接辞、連結詞などである。これらはその言語や語族内においてお互いに直接的、間接的に関連が深く、この事実からオーストロネシア諸言語の*\*i*の機能が復元されて来ただけでなく、日本語、琉球語との関係が単に語彙のレベルだけではなく、言語の中核である形態論のレベルにおいて深い関係がかつてあったということを示唆し得るものである。しかし、このことが直ちに日本語/琉球語がオーストロネシア語族に帰属すると言うのではない。即ち、日本語/琉球語とオーストロネシア語族との関係をさらに解明しなければならぬが、序で触れたように、その関係は(1)借用(2)同源(3)言語接触による多量借用などであると考えられるが、どれにしてもオーストロネシア系言語の層が日本語の中に存在していると考えられることである。この点に関しては結論のところで詳しく見る。

S6 オセアニア(主にオセアニア)諸言語の*si*の様々な機能

オセアニア祖語の代名詞は基本的にメラネシアやインドネシア諸言語から*\*i*と復元されているように、もうひとつのオセアニア祖語の代名詞も同様に*\*si*と復元されている。この代名詞はさらには*\*s-i*から発達したものであり、もう一つの代名詞*\*i*と直接関係がある(崎山 1990:209-210)。

ニューギニア周辺地域とインドネシアの西部を含めた限定された地域において、三人称単数形*\*i*(短形)と複数形*\*si*(短形)の対が見られるのに対して、オセアニア東部の諸言語ではそれに相当する三人称単数形*\*na*と複数形*\*la*が見られる(あるニューギニアの地域ではこの前者と後者の対の混成形態が見られる)。

代名詞\*siは機能においても一つの代名詞\*iよりも極端に制限されている。それはおそらく代名詞\*siと同形であるが起源を異にする人名冠詞\*siがその機能において代名詞\*siよりも広く分布するようになったため、代名詞\*siの機能が減少したものと考えられる(崎山 1990:209-210)。

[1]定冠詞用法

定冠詞siはそれが付随する名詞を特定化する機能であるが、これはオーストロネシア祖語(PAN) \*t'idaまたは\*t'idaに遡る。この第二音節が脱落し、その第一音節がオセアニア祖語(POC) \*siに変化したものである。ヘスペロネシア語派の言語にはこの定冠詞siと同形態で異義ではあるが非常に近似的意味をもつ人名冠詞siが見られる。しかしこれはその起源を定冠詞のそれとは異にする。即ち、人名冠詞siはPAN \*t'idaから発達したものである(崎山 1990:210)。例を一つ挙げるが、あいにくそれを支持する例文をあげることがこの時点ではできない。

ロヴィアナ語(Roviana): si [崎山・1990:210]

[2]人称代名詞用法

人称代名詞用法には下位区分として3つある。

- (1)一人称代名詞主格用法
- (2)三人称代名詞主格用法
- (3)三人称代名詞所有格用法

一人称代名詞主格用法は三人称代名詞主格用法から派生したものと考えられる。

[2.1]一人称代名詞主格用法

一人称代名詞主格用法は特に単数形は現時点では見当たらないが、複数形のみが見られる。二三の例を挙げる。

ウォレアイ語(Woleaian): si[複数、包括、主格] [Sohn 1975:94]

(1)giish ila si shepar ngalig [1975:94]

giish ila si shepar ngali-g

[1複包括] [文導入詞] [1複包括主格] 信用する-[2単]

「私たちはあなたを信用する」

トラック語(Trukese): si[複数包括] [崎山 1990:210]

この代名詞用法は単に代名詞のみを示すのではなく、主格をも示す点に特長があり、それは例1に示した通りである。従って、前述のそれに相当する代名詞のみの用法とは異なる。トラック語の例文は挙げることはできないが、これもウォレアイ語と全く同じ用法の例文があると思われる。

[2.2]三人称代名詞主格用法

三人称代名詞主格用法は本来の用法に一番近いものであったと思われるが、ここではあいにく例文を挙げることはできないが、崎山の述べているように、主格用法であろう。この用法は古代日本語の三人称代名詞用法に最も近い。古代日本語では一般的な用法として存在していたが、siはその直後に常に所有格接尾辞ngaを伴い、siそれ自体は三人称代名詞であり、その点は異なっている。

ビアク語(Biak): si[有生] [崎山 1990:210]

シオ語(Sio) : si[有生] [崎山 1990:210]

両言語ではこの三人称代名詞主格用法であるが、主語となるものは有生のものでないといけない。この点は古代日本語も全く同じである。

[2.3]三人称代名詞所有格用法

三人称代名詞所有格用法は所有者と被所有者/物の関係のみを表し、属格は表さない

ようである。次の例文を見てみる。

ラヴォンガイ語(Lavongai): si [Beaumont 1988:11]

(1) a pua lu si ri vap [1988:11]

a pua lu si ri vap  
[冠詞] [複不変化詞] 家 [3複所有] [冠詞] 人々  
「その人達の家」

(2) a mani si anitun ke [1988:11]

a mani si anitun ke  
[冠詞] お金 [3単所有] 男の人 [指示詞]  
「この男の人のお金」

アチン語(Atchin): si [Capell & Layard 1980:44]

(1) lolo'm si wijewin [1980:44]

lolo'm si wijewin  
家 [3単所有] 女の人  
「その女の人の家」

(2) (wijewin) si tutuʃan [1980:44]

(wijewin) si tutuʃan  
女の人 [3単所有] 兄  
「彼の兄の妻」

例]を除いて他の例はすべて単数形であるが、どの例もすべて三人称代名詞所有格を示している。

### [3]不定代名詞用法

これまで見たsiの用法は比較的限定的なものであったが、この不定代名詞用法はこれまでの用法と矛盾しているように見える。しかしながら、この用法は実際にはその不定の有生物を限定または特定する機能をもつのであって、その意味においてこの不定代名詞用法には矛盾はない。つぎの例を見てみる。

ブゴツ語(Bugotu): si [崎山 1990:210]

(1) si na mane [1990:210]

si na mane  
[不定] [単指示] 男の人  
「ある(特定の)男の人」

この用法は例に見るように、定冠詞用法とは全く反対の不定のものに対して使用されるものである。

### [4]接辞

siには接頭辞と接尾辞の両方があり、それぞれ異なった機能をもっている。

#### [4.1]接頭辞

接頭辞si-には二つの異なった用法がある。

##### (a)名詞化用法

名詞化用法si-は周辺の用法かも知れないが、これに対応する接頭辞i-は比較的広範に広がっている。例を一つ挙げる。

トバ・バタック語(Toba-Batak): si- [Van Der Tuuk 1971:245-6]

(1) si-panganon 「食料」

(2) si-panimbangi 「その女性の前夫が払ったと同額をその女性に払わなければならない人」

Van Der Tuuk[1971:246]はこのトバ・バタック語の接頭辞について次のように述べている。

接頭辞*si-*は名詞化の機能を持ち、しばしばその名詞を完全なものにするために動詞から派生した名詞の前に位置させることがある。そうすることで動詞的な性格が前景から背景へと変化するのである。

この叙述から接頭辞*si-*の性格が如実に理解されるが、中でもこの接頭辞が生産的な機能を果たしていないように見える。それはこの接頭辞の存在が非常に古いものであることを暗示しているように思える。

接頭辞*si-*のこの名詞化用法は接頭辞*i-*の名詞化用法と同じであり、またこの接頭辞*si-/i-*の対はオセアニア祖語の三人称代名詞複数\**si*/単数\**i*に対応する。このことはこの接頭辞の対がオセアニア祖語の三人称代名詞から間接的に派生して来たのではないかということを示しているように思う。

#### (b)相互用法

接頭辞*si-*の相互用法はいくつかのオーストロネシア諸言語に見られるが、これはちょうど接頭辞*i-*の相互用法と同じである。しかしながら、この用法は周辺的であると考えられる。いくつかの例を見てみる。

デュリ語(Duri): *si-* [Valkana 1995:25]

- |                             |                     |
|-----------------------------|---------------------|
| (1) <i>si-kita</i> 「互いに見る」  | < <i>kita</i> 「見る」  |
| (2) <i>si-ala</i> 「結婚する」    | < <i>ala</i> 「取る」   |
| (3) <i>si-rari</i> 「互いに戦う」  | < <i>rari</i> 「戦う」  |
| (4) <i>si-tammu</i> 「互いに会う」 | < <i>tammu</i> 「会う」 |
| (5) <i>si-tiro</i> 「互いに探す」  | < <i>tiro</i> 「求める」 |

サマ語/バジャウ語(Sama/Bajau): *si-* [Verheijen 1986:13]

- |                               |                       |
|-------------------------------|-----------------------|
| (1) <i>si-tuppi</i> 「互いに近づく」  | < <i>tuppi</i> 「近い」   |
| (2) <i>si-rekkaq</i> 「一緒につける」 | < <i>rekkaq</i> 「つける」 |
| (3) <i>si-gagga</i> 「口論する」    | < <i>gagga</i> 「強い」   |

サマ語/バジャウ語の相互用法はその形成用法においてデュリ語と全く同じである。これらの例における相互行為や動作の終点はその両方の対象に向けられ、それがこの接頭辞*si-*の機能であると考えられる。その点においてこの接頭辞は指示的な局面をもっていると考えられる。

#### [4.2]接尾辞

接尾辞*-si*の用法はただひとつのようである。例文はこの時点では挙げられないが、次のような言語にこの用法が見られるようである。

##### (a)三人称代名詞複数主格用法

ブゴツ語(Bugotu): *-si*[3複数有生] [崎山 1990:210]

以上のように日本語*i/si*とオーストロネシア諸言語*i/si*のすべての用法を見たが、古代日本語の*i*と*si*のすべての用法は日本祖語以前に指示を表す代名詞\**i*と\**si*が存在し、その後日本祖語には既に派生したいくつかの用法が発達し、その後さらに色々に派生した代名詞や接辞の用法が存在したと考えられる。

オーストロネシア諸言語では、オセアニア祖語の段階において指示を表す三人称代名詞\**i*と\**si*が存在したとされる(Capell 1969:50)が、それが後にパプア・ニューギニア地域においてはその三人称代名詞の存在がより鮮明になり、*i/si*の単/複の対をなすようになったと考えられる(崎山 1990:215)。

この日本祖語の\**i*/\**si*の発達形態はオセアニア祖語のそれらの発達形態と軌を一にしていると考えられると同時に比較可能であり、究極的には同起源であると考えられる。これまで見たように、POC \**i* は特定の/限定的であり、その性質は単数という性格から

生じてくるものであり、それが色々な用法や形態を派生したのに対し、POC \*siは非特定の/不定的であり、その性質は\*siが複数という性格から出てくるもの(pluralis extensus)であるとしている(崎山 1990:211)。

このPOC \*iの特定の/限定的性質は古代日本語のiの色々な用法に現れる性質と同じであると考えられる。また同様にPOC\*siの非特定の/不定的性質は古代日本語のsiの色々な用法に見られる性質とも同じであると考えられる。

崎山(1990:211-2)は古代日本語にはiとsiが対になって存在していたように、eとseが存在したとし、それはそれぞれ「夫、兄、背」と「兄、姉」の意味で使われ特殊化していたものの、はっきりとした対をなしていたと見ている。この用法はオセアニア祖語のe/seの代名詞の対から継承されたもので、オーストロネシア諸言語ではeの用法、(1)人称冠詞(e.g. e Joni「ジョンを」[ロヴィアナ語(Roviana)]);(2)述部導入詞(e.g. e tutuni「それは事実だ」[ブゴツ語(Bugotu)]);(3)前置詞(e.g. e Kavieng「カヴィエンで」[ティガック語(Tigak)])があり、またseの用法としては(1)人称冠詞(e.g. se Joni「ジョンを」[ロヴィアナ語(Roviana)]);(2)後置詞[主格指示](e.g. tau (e)se「男が」[モツ語(Motu)])がある(崎山 1990:212)。

また、日本祖語の\*i/\*siのオセアニア祖語との同源性をさらに強化するものとして村山(1975 197-200)、崎山(1990:213-4)などが示しているように、オーストロネシア諸言語では連結詞na/nōに変化した、本来オセアニア祖語の指示的代名詞であったnaと古代日本語の一、二人称代名詞naと連結詞na/nō/ŋgaとの同源性が示唆されていることから、この同源性は仮説としてもほぼ確実のように思える。

さらにはAkiba-Reynolds(1984 1-23)や崎山(1990 212-3)が古代日本語の処格とコンピュータのniの形成過程を論じている(両者の内容が著しく異なり、前者はクリオール説、後者は混成説を唱えているが、起源的には両者ともにオーストロネシア系言語から継承したとする。拙稿の筆者は後者を支持する)が、本来の指示的な代名詞\*iからの派生であると考えられる。

これらのことを総合すると、古代日本語のi/siは関連性がこの二者だけにとどまらず、ni、na、nō、ŋgaなどと深く根底で連結していると考えられるのである。このことはさらには形態部分の重要な一部がオーストロネシア諸言語と深い関係をもっていることを示唆しているように思う。

これまで見たように、色々な用法の酷似性から推察して、特に古代日本語さらには日本祖語に遡った段階での\*i/\*siの機能はオセアニア祖語のそれと深い関係があったことが示唆される。この酷似性は形態論のレベルにおけるものなので、単なる借用ではないことは明らかである。勿論、酷似している形態の数からして、偶然の一致などは到底考えられない。それではその他の可能性としては上述したように、同源または多量借用のいずれかである。

言語全体からみると、多量借用は言語接触によるものであるから、単に借用したものとは異なり、ある特定の条件が必要である。それは次のような状況である。日本列島のように島であれば、列島内での言語接触はオーストロネシア系言語が一つではなく複数個共存していた可能性が高く、さらに他の系統の言語も多数存在していたに違いない。しかしながら、どの言語にしても地理的に孤立的であったらうから、言語接触が発生した地域は系統の異なった多くとも2、3の言語であったと考えられる。このような条件の下では単なる語彙の借用は多数あったと考えられると同時に多言語間ではなく二言語間接触を想定した方がより現実的であると考えられる(板橋 1998)。またこれはその理論的裏付けともなるが、古代日本語の語彙や文法的要素におけるオーストロネシア系の層とアルタイ系の層の混成状況から本来どちらの系統の層がi/siをもたらしただかを言語変化の類型論的見地のみから理論的に推定することができるのである。

しかし、古代日本語のi/siのみを考えると、その帰属言語を考えればよいことになり、同源といっても言語接触による多量借用といってもよいように思える。が、これでは言語全体の形成状態が部分的にしか把握できないことになるし、日本語の起源と言った場合にはその起源が2つ別な系統の言語から継承されて来ているので、日本語の起源は存在しないことになる。従って、上記のように言語全体から見た方がよいことになり、言語継承と言語接触による多量借用がより現実味があることが理解される。

さらに時間を考慮すると、オーストロネシア系言語が複数個日本列島に存在したと考える時、それは一回限りのその系統の言語の波が押し寄せたのではなく何回か複数回押し寄せたと考えるのがより妥当であると考えられる。そのことはさらには古代日本語にはオーストロネシア諸言語のどの言語にも見られないほどの数多くの*i*と*si*の用法の存在理由となると考えられる。

### 結論

以上のことから結論として言えることは、古代日本語の*i/si*の様々な機能がオーストロネシア諸言語に見られる*i/si*の類似した機能と同起源であろうといえること、その同起源性を裏付ける他の形態論レベルにおける、同起源であると考えられる形態素が両言語に存在すること、即ち、一連の体系的な指示的代名詞(人称代名詞を含む)が同起源であろうということである。

古代日本語における形成過程は言語継承と言語接触による多量借用であり、日本語全体から見れば、オーストロネシア系言語(継承)とアルタイ系言語(多量借用)の混成言語としての性格が濃厚ではないかと考えられる。

参考文献

オーストロネシア諸言語:

1. 崎山理 1990「古代日本語と原オセアニア語の指示詞の体系」崎山理編『アジア言語と一般言語学』206-219頁、三省堂
2. 土田滋 1980「プユマ語(タマラカオ方言)語彙-付・語法概説およびテキスト」黒潮文化の会編『黒潮の民族・文化・言語』183-307頁、角川書店
1. Abrams, N. 1970, Bilaan Morphology, Pacific Linguistics A-24
2. Allen, Jerry et.al. 1987, Halia Grammar, Data Papers, On Papua New Guinea Languages Vol. No.32, Summer Institute of Linguistics, Ukarumpa, Papua New Guinea
3. Asai, Erin 1936, A Study of the Yami Language, an Indonesian Language Spoken on Botel Tobago Island, Leiden:J. Ginsberg
4. Asai, Erin 1953, The Sedik Language of Formosa, Cercle Linguistique de Kanazawa, Kanazawa University, Kanazawa, Japan
5. Beaumont, Clive H. 1974, The Tigak Language of New Ireland, Pacific Linguistics B-58
6. Bender, Byron 1971, "Micronesian Languages", Current Trends in Linguistics 8: 426-465
7. Benton, Richard A. 1971, Pangasinan Reference Grammar, University of Hawaii Press
8. Biggs, Bruce 1971, "The Languages of Polynesia", Current Trends in Linguistics 8:466-505
9. Biggs, Bruce 1996, Let's Learn Maori, Uniprint, University of Auckland
10. Blake, Frank 1925, A Grammar of the Tagalog Language, American Oriental Society
11. Bugenhagen, Robert D. 1995, A Grammar of Mangap-Mbula:An Austronesian Language of Papua New Guinea, Pacific Linguistics C-101
12. Burbidge, Geo W. 1930, A New Grammar of The Tahitian Dialect of The Polynesian Language, The Church of Jesus Christ of Latter Day Saints
13. Capell, A. 1969, Grammar and Vocabulary of the Language of Sonsorol-Tobi, Oceania Linguistic Monograph No.12
14. Capell, A. 1969a, A Survey of New Guinea Languages, Sydney University Press
15. Capell, A. 1971, "The Austronesian Languages of Australian New Guinea", Current Trends in Linguistics 8:240-340
16. Capell, A. 1976, "General Picture of Austronesian Languages, New Guinea Area", New Guinea Area Languages and Language Study, Vol.2 Pacific Linguistics C-39:5-52
17. Capell, A. & Layard, 1980, Materials in Achin, Malekula: Grammar, Vocabulary and Texts, Pacific Linguistics D-20
18. Carpentier, Jean-Michel 1994, "Port Sandwich" in Pacific Linguistics C-39: 5-52 in Capell, Vol.2, Pacific Linguistics C-39:5-52
19. Charpentier, Jean-Michel 1994, "Port Sandwich" in D. Tyron(ed.) Comparative Austronesian Dictionary, Fascicle 2 Churchward, C. Maxwell 1985, Tongan Grammar, Tonga:Vava'u Press
20. Costenoble, H. 1935, Die Chamoro Sprache, 'S-Gravenhage:M. Nijhoff
21. Counts, David R. 1969, A Grammar of Kaliai-Kove, Oceanic Linguistics Special Publication No.6, University of Hawaii Press
22. Cowell, Reid 1951, The Structure of Gilbertese, Rongorongo Press
23. Dahl, Otto C. 1976, Proto-Austronesian, Scandinavian Institute of Asian Studies Monograph Series, No.15, London:Curzon Press

24. Dixon, R. M. W. 1988, A Grammar of Boumaa Fijian, University of Chicago Press
25. Dong, Kang & Ma, Róng Sheng 1986, A Brief Sketch of Formosan Languages (Paiwan Language), Beijing:Minzu Chubanshe
26. Durie, Mark 1985, 1985, Grammar of Achnese, Foris Publications Cinaminson, USA
27. Dyen, Ishidore 1965, A Sketch of Trukese Grammar, American Oriental Series, Essay 4
28. Dyen, Ishidore 1965a, "Formosan Evidence For Some New Proto-Austronesian Phonemes", Lingua 14:285-305
29. Dyen, Ishidore 1971, "The Austronesian Languages and Proto- Austronesian", Current Trends in Linguistics 8:5-53 Dyen, Ishidore 1971a, "The Austronesian Languages of Formosa", Current Trends in Linguistics 8:168-199
30. Egerod, Søren 1978, Atayal-English Dictionary, Vol. 1, Malmö, Denmark:Curzon Press
31. Egerod, Søren 1980, Atayal-English Dictionary, Vol. 2, Malmö, Denmark:Curzon Press
32. Elbert, Samuel H. 1974, Puluwat Grammar, Pacific Linguistics B-29
33. Elbert, Samuel H. & Pukui, Mary K. 1979, Hawaiian Grammar University of Hawaii
34. Ezard, B. & Yailo, R. 1994 "Tawala" in D. Tyron(ed.) Comparative Austronesian Dictionary, Fascicle 2
35. Ferrell, Raleigh 1982, Paiwan Dictionary, Pacific Linguistics Series C No. 73 Australian National University
36. Formen, Mikael L. 1971, Kapampangan Grammar Notes, University of Hawaii Press
37. Fox, G. J. 1979, Big Nambas Grammar, Pacific Linguistics B-60
38. Geraghty, Paul A. 1983, The History of the Fijian Languages, University of Hawaii Press
39. Guy, J. B. M. 1974, A Grammar of the Northern Dialect of Sakao, Pacific Linguistics B-33
40. Harrison, Sheldon P. 1976, Mokilese Reference Grammar, University of Hawaii Press
41. He, RuFen, et.al. 1986, A Brief Sketch of Formosan Languages(Ami Language), Beijing:Minzu Chubanshe
42. He, RuFen, et.al. 1986, A Brief Sketch of Formosan Languages(Bunun Language), Beijing:Minzu Chubanshe
43. Horne, Elinor C. 1974, Javanese-English Dictionary, Yale University Press
44. Izui, Hisanosuke 1965, "The Language of Micronesia:Their Unity and Diversity", Lingua 14:349-359
45. Jensen, John T. 1977, Yapese Reference Grammar, University of Hawaii Press
46. Josephs, Lewis S. 1975, Palauan Reference Grammar, University of Hawaii Press
47. Karena-Holmes 1995, Maori Language, University of Otago Press
48. Lawton, Ralph 1994, "Kilivila" in D. Tyron(ed) Comparative Austronesian Dictionary, Fascicle 2
49. Lee, Kee-dong 1975, Kusaiean Reference Grammar, University of Hawaii Press
50. Li, Paul Jen-kuei 1994, "Atayal" in D. Tyron (ed.) Comparative Austronesian Dictionary, Fascicle 1
51. Lichtenberk, F. 1983, A Grammar of Manam, University of Hawaii Press
52. Lister-Turner, R. & Clark, J. B. 195?, A Grammar of the Motu Language of Papua, Government Printer, Sydney, N. S. W.
53. Llamazon, Teodoro 1978, Handbook of Philippine Language Groups, The Atineo De Manila University Press



54. Lynch, John 1978, A Grammar of Lenakel, Pacific Linguistics B-55
55. Lynch, John 1982, "South-West Tanna Grammar Outline and Vocabulary", Papers in Linguistics of Melanesia No. 4, Pacific Linguistics A-64:1-91
56. Lynch, John 1982, "Anejom Grammar Sketch", Papers in Linguistics of Melanesia No. 4, Pacific Linguistics A-64: 93-154
57. Lynch, John (ed.) 1983, Studies in the Languages of Erromango, Pacific Linguistics C-79
58. Macdonald, R. Ross & Darjowidjojo, Soenjono 1967, A Student's Reference Grammar of Modern Formal Indonesian, Georgetown University Press
59. Mintz, Malcolm W. 1971, Bikol Grammar Notes, University of Hawaii Press
60. Mosel, Ulrike, 1984, Tolai Syntax and its Historical Development, Pacific Linguistics B-92
61. Mosel, Ulrike, & Hovdhaugen, Even 1992, Samoan Reference Grammar, Scandinavian University Press
62. Nihira, Yoshiro 1988, A Bunun Vocabulary, Tokyo:Ado-In KK
63. Nababan, P. W. J. 1981, A Grammar of Toba-Batak, Pacific Linguistics D-37
64. Osumi, Midori 1995, Tinrin Grammar, Oceanic Linguistics Special Publication No. 25, University of Hawaii Press
65. Ozanne-Rivierre, F. 1994, "Nemi" in D. Tyron(ed) Comparative Austronesian Dictionary, Fascicle 2
66. Paton, W. F. 1971, Ambrym(Lonwolwol) Grammar, Pacific Linguistics B-19
67. Percival, W. K. 1981, A Grammar of the Urbanised Toba-Batak of Medan, Pacific Linguistics B-76, ANU Press
68. Poedjosoedarmo, Gloria R. 1986, "Role Structure in Javanese", NUSA Vol. 24, Universitas Katolik Indonesia Atma Jaya
69. Ross, Malcolm 1994, "Tokia" in D. Tyron(ed.) Comparative Austronesian Dictionary, Fascicle 2
70. Salme, E. & Bugenhagen, R. 1994, "Mbula" in D. Tyron(ed.) Comparative Austronesian Dictionary, Fascicle 2
71. Schachter, Paul & OTanes, Fe 1972, Tagalog Reference Grammar, University of California Press
72. Schütz, Albert J. 1969, Nguna Grammar, University of Hawaii Press
73. Schütz, Albert J. 1985, The Fijian Language, University of Hawaii Press
74. Sneddon, J. N. 1975, Tondano Phonology and Grammar, Pacific Linguistics B-38
75. Sneddon, J. N. 1978, Proto-Minahasan:Phonology, Morphology and Wordlist, Pacific Linguistics B-54
76. Soberano, Rosa 1980, The Dialects of Marinduque Tagalog, Pacific Linguistics B-69
77. Sohn, Ho-min 1975, Woleaian Reference Grammar, University of Hawaii Press
78. Stamm, Josef & Donaldson, Tamsin & Beaumont, Clive H. & Lloyed, M. J. 1988, Lavongai Materials, Pacific Linguistics D-82.
79. Stevens, Alan M. 1965, Madurese Phonology and Morphology, Ph.D. Dissertaton Yale University
80. Suharno, Ignatius 1982, A Descriptive Study of Javanese, Pacific Linguistics D-45
81. Svelmoe, Gordon and Thelma 1974, Notes on Mansaka Grammar, Asian-Pacific Series No. 6, Summer Institute of Linguistics Huntington Beach, California
82. Teslkin, A. S. 1972, Old Javanese(Kawi), Cornell University Press
83. Topping, Donald M. 1973, Chamorro Reference Grammar, University of Hawaii Press
84. Tsuchida, Shigeru 1976, Reconstruction of Proto-Tsyouic Phonology, Study of Languages and Cultures of Asia & Africa, Monograph Series No. 5, Tokyo

- University of Foreign Studies Press
85. Tyron, Darrell, 1994, "Palawan" in D. Tyron(ed.) Comparative Austronesian Dictionary, Fascicle 1
  86. Valkana, Susanne 1995, "Notes on Duri Transitivity" in Studies in Sulawesi linguistics, Part IV, NUSA Vol. 37
  87. Van Der Tuuk, H. N. 1867/1971, A Grammar of Toba-Batak, The Hague-Martinus Nijhoff
  88. Verheijen, Jilis A. J. 1986, The Sama/Bajau Language in the Lesser Sunda Islands, Pacific Linguistics D-70
  89. Voorhoeve, C. L. (ed.) 1982, The Makian Languages and their Neighbors, Pacific Linguistics D-46
  90. Walrod, Michael 1976, Case in Ga'dang Verbal Clauses, Pacific Linguistics A-46
  91. Walsh, D. S. 1994, "Raga" in D. Tyron(ed.) Comparative Austronesian Dictionary, Fascicle 2
  92. Williams, Herbert 1971, A Dictionary of Maori Language, Department of Education in New Zealand
  93. Wolfenden, Elmer P. 1971, Hiligaynon Reference Grammar, University of Hawaii Press
  94. Woollams, Geoff 1996, A Grammar of Karo Batak, Sumatra, Pacific Linguistics C-130

中期中国語:

1. Baxter, William 1992, A Handbook of Old Chinese Phonology, Berlin: Mouton de Gruyter
2. Karlgren, Bernhard 1972, Grammata Serica Recensa, The Museum of Far Eastern Antiquities, Bulletin 29, Stockholm

ABSTRACT

The Morphological Cognateship between Old Japanese and Austronesian

This paper is an attempt to find out the cognateship of all the uses of the Old Japanese pronouns i/si and pronominal affixes i/si with various uses of the Oceanic deictic pronominals \*i/\*si. In conclusion, we have found that these elements of both languages must be cognate with each other on the grounds that not only all the functions of both languages but the developments of these elements of both languages are extremely similar to each other. This is probably due to the fact that the pre-Proto-Japanese must have been some minimally maintained Austronesian (probably some oceanic languages) possibly with some Austroasiatic elements, which later continually borrowed massive structural elements from Altaic, especially Tungusic languages (if we are permitted an oversimplification from chronologically layered Altaic, especially Tungusic contributions to the Japanese structure).

